『メイドインドリーム　～　姫様とメイドの甘々生活　～』

特典シナリオ台本

【登場人物】

シーナ・プブレリウム（１６）

姫様（あなた）と暮らしている素直で可愛らしいメイド。
メイドとして教育されてきたので仕事の一面では大人びてはいる。
しかし、幼い頃からずっと一緒に過ごしてきたこともあり、
時折くだけた子供っぽい姿もみせる。

ずっと姫様のことを思い続けて、最近恋人関係になった。
恋愛については経験が浅いため、まだ様々なことに恥じらいがあるが、
姫様の要望に一生懸命答えようとしている。

【あらすじ】

あなたは、とある世界のお姫様。
街から離れた郊外にひっそりと立つ小さなお屋敷で
あなたはメイドの「シーナ」と二人きりで暮らしております。

今日は久しぶりのお休み。
あなたとシーナは、朝から晩までお屋敷でゆっくりすることに。
メイドであり恋人でもあるシーナと過ごす、穏やかで甘いひと時。

あなただけのメイドにお姫様扱いされる
素敵な時間を過ごしてみませんか？

【EP01：朝の光　愛しい目覚め】

○廊下

朝食の準備を終えたシーナ。
廊下で鼻歌を歌いながらあなたの部屋にやってくる。

「エルガー・愛のあいさつ（鼻歌で）」

○ドア前

シーナ、ドアをノックする。

「おはようございます。姫様。シーナでございます。
朝食の準備ができましたので、お知らせに参りました」

声をかけるが、返事がない様子。

「姫様ー？……寝てるのかな」

独り言を呟いた後、こっそり入室する。

「失礼します」

○姫様の部屋

部屋に入り、姫様が寝ているベッドに近づいていく。

「……やっぱり。まだ起きてなかったのですね」

「……枕元に本。さては、昨日夜更かししましたね？
ベッドに入ってからの読書はほどほどにしてくださいって、
いつも言ってるのに……」

「……姫様。姫様。ほら、起きて。おきてくださーい」

「……今日の朝食は、昨晩仕込んでおいたミルクポタージュ、
採れたてのキャベツとトマトのサラダ。
外はふっくら、中はトロトロのオムレツ。
それから、いちごのジャムを塗った焼き立てのパン……」

「はやく起きないと、冷めちゃって勿体ないですよ？」

「……もう。せっかくお休みの日なのに……。
シーナを放っておいて、気持ちよく夢の中ですか。あーあ」

「……姫様がそんなに悪い子なら、シーナも悪い子になっちゃいますよ？
……なっちゃいますからね？」

シーナ、姫様が寝ているベッドに忍び込む。

「……そおっと。……よし。よいしょ、よいしょっと。
ベッドの中、入っちゃいました。
……あったかくて気持ちいい……。
シーナもこのまま寝ちゃおうかなあ？」

シーナ、ベッドの中で匂いを嗅ぐ。

「くんくん……。くんくん……。
姫様の匂い。甘い香りがする」

「くんくん……。くんくん……。
匂いを嗅ぐだけで、どうしてこんなに幸せな気持ちになるんだろ」

「……もっと近くで嗅いじゃおうかな。……いいよね。
……姫様が、起きないのが悪いんですからね」

「くんくん、くんくん。くんくん、くんくん。
んー。やっぱり好き。この匂い。……好き」

「ふう。なんだか、シーナだけ幸せになってバチが当たりそう」

「……こう寝顔をみてると赤ちゃんみたい。かわいい。ふふっ」

「……ねえ、姫様。シーナ、今日夢を見たんです。姫様の夢」

「夢にまで出てくるなんて、
本当にシーナは、姫様のこと……好きなんだって思いました」

「夢の中でも会えて嬉しかった。
寝ても覚めても、傍にいられるのは、シーナだけの特権です」

「……姫様はいま、どんな夢をみてるんですか？
シーナの夢、見てくれてるといいな」

「……。姫様、いつ起きてくれるかな。
……このまま一人で起きてるのも、ちょっと寂しいな」

姫様、少しモゾモゾ動く。（寝ている振りをしている）

「……あれ？　あれれ？
姫様、今一瞬、動きませんでしたか……？　気のせい？」

姫様、黙っている。

「……もしかして、姫様……。もう起きてたりしますか？
寝たフリとか、してないですよね？」

「……あやしいなあ。
シーナの得意技で、ちょっと確かめさせていただきますね」

シーナ、耳元に近く。

「ふふっ。じゃあ、耳、失礼しますよ。
ふーっ。ふーっ。ふーっ……。
あ、動いた！　やっぱり起きてたんですね……！」

「ふーっ。ふーっ。あ、いま、笑った。笑いましたね。
ふーっ。ふーっ。もう、逃げちゃダメですってばー！
ふふふっ。ははは。姫様、バタバタし過ぎです……」

「シーツもめちゃくちゃ……。そんなにくすぐったかったですか？」

「……いじわるしてません。
姫様が悪いんですよ。すぐに起きてくれないし、
寝たフリなんてするから。
シーナは、メイドとして
『姫様を起こす』という仕事を全うしたまでです」

「……そういえば姫様。いつから起きてたんですか？
……………鼻歌から聞いてたって……。独り言も全部？
それはちょっと……恥ずかしいですね」

「……笑わないでください。本当に姫様が夢に出てきたんですから。
……え？　姫様もシーナの夢を？　嘘じゃないですよね……？」

「……えへへ、嬉しいなあ。夢の中でも一緒にいれたんですね。
あ、でも、目の前にいるシーナの方を大事にしてくださいね？」

「……姫様。今日は、どのように過ごしましょうか？
……そうですね。
たしかにここ数日は、
お屋敷の外に出ることが多くてバタバタしてましたね」

「……ええ。姫様はご立派に、よく頑張っておられました。
シーナは傍でずっと見ていましたから、姫様のこと」

「……そんなお疲れの姫様に、シーナから一つ提案です。
今日はこのお屋敷の中で、二人でゆっくり過ごしませんか？」

「どうでしょう？　お庭を散歩したり、紅茶を飲んだり……。
慌ただしい日常は忘れて、のんびり過ごすものよいかと思うのですが……。
いかがでしょう？」

「……本当ですか！？　ありがとうございます。
姫様が寛げるよう、シーナが存分に姫様をおもてなしさせて頂きます」

「……わかってます。
お茶菓子には姫様の大好きなシーナ特製のクッキーを焼きますから」

「……ふふふっ、久しぶりですね。こういう日は。
姫様と過ごす休日。とっても楽しみです。
……実はすこし、寂しかったんです。
最近あまり二人の時間を取れなかったから……」

姫様、シーナを抱きしめる。

「ちょ、ちょっと……！　姫様！？
いきなりどうしたんですか？　急に抱きしめるの、反則ですよ。
心の準備、できてないのに……」

「もう、姫様ってば、甘えん坊さんなんだから。
……姫様がぎゅーってするなら、シーナもお返しぎゅーしちゃいます」

シーナ、姫様を抱きしめ返す。

「ぎゅーー……。ぎゅーー……。ぎゅーー……。
……ふふっ、シーナ、今、姫様とこんなに密着しちゃってます。
心臓の音がトクトク聞こえちゃいそうなくらい」

「本来メイドは、こういうことしちゃいけないみたいですけど……。
シーナは姫様の恋人でもありますから、特別ですね」

「このぬくもりも、柔らかさも、ぜーんぶ特別。
姫様だからシーナは尽くしたいんです。
だってシーナは、姫様だけのメイドですから」

「……そろそろベッドから出ましょうか。
美味しい朝食が待ってますよ」

「……ん？　どうかしましたか？　お願い……？
はい。なんでしょう？」

「……おはようの、ち、ちゅーですか……？
たしかにお姫様はキスで目覚めるものかもしれませんが、
それは童話の中だけで……」

「……うう、たしかに。まだシーナからは、キスしたことないですけど」

「……じゃあ、それじゃあ、
キスしたら、ちゃんと起き上がってください。
……約束ですからね？」

シーナ、姫様にキスをする。

「……んー。……はい。キス、しました。
……え？　もっと？
ダメです、一回したんですから。……もう、姫様ったら。」

「……ん。……ん。……ん。……もういいですか？」

シーナ、あなたからのキスに応える。

「ん！……んっ！
ひ、姫様！　姫様からキスするのは、ずるいですよお……。」

「もうダメです。ご飯、冷めちゃう……」

「……このままだと、ずっとしたくなってしまいますから。
続きはまた後でしましょう？　……ね？」

「さあ、起き上がりましょう」

シーナ、姫様を起こしてあげる。

「……はい。よく起きられました。
おはようございます、姫様。
今日も素敵な一日にしましょうね」

【EP02：お着替えの時間　可愛いあなた】

○姫様の部屋

「さあ、姫様。
そろそろお着替えをいたしましょうか。
いつまでもパジャマのままでいたら、お外に出られませんから」

「今日のドレスは如何いたしましょう？
候補はたくさんありますけど……。
姫様は、着たいものありますか？」

「……シーナが選ぶのは構いませんが、それでよろしいのですか？
……わかりました。それではシーナにお任せください。
とびきり可愛い格好にしちゃいますから」

「どうしようかなあ。姫様はなんでも似合うからなー。
迷ってしまいますね……。んー……。
あ、そうだ。……アレにしよう」

「……ふふふっ。それは、見てからのお楽しみです」

「では、ドレスをとって参りますので、少々お待ちください」

シーナ、ドレスを運んでくる。

「(運びながら) よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ……」

「お待たせしました。姫様にぴったりのドレスを選んで参りました」

「……じゃーん。どうですか？　このドレス。
見たことない、ですよね？
ふふふっ、実はこれ、卸したてなんです」

「市場で買い物している時に見つけて、
つい衝動買いしてしまって……。
姫様にいつか着て貰いたくて、
ずっとクローゼットの中にしまっておりました」

「……だって姫様、悩むとすぐ着慣れたものばかり選ぶでしょう？
卸すタイミングがなかなか見つからなくて……。
だから今日、チャンスだと思って持ってきてしまいました」

「……そうですか。姫様も気に入ってくださいましたか。
ふふっ、早く袖を通した姿が見てみたいです」

「では、お着替えしていきましょうか。
いつものようにシーナがお手伝いさせて頂きますね」

「じゃあまずはパジャマの上から脱がしますよ」

「シャツのボタンを外させて頂きますね。上から……」

シーナ、シャツのボタンを外していく。

「ボタンが外れましたよ。
それでは、腕を抜いて脱ぎ脱ぎしてください」

姫様、袖から手を出していく。

「お次は下ですね。ズボン、下ろしますね」

シーナ、姫様のズボンを下ろす。（少し勢いが強い）

「えいっ！　あ、すみません。ちょっとびっくりさせちゃいましたか？
……寒いのは、少し我慢してください。
着替えが終わればあったかくなりますから。
さあ、足を抜いてください」

姫様、足を一歩ずつズボンから抜いていく。

「……右足、左足。はい。よくできました」

「(恥じらいながら) ……もうそろそろ、脱ぐのくらい一人でしませんか？」

「……嫌、というわけじゃなくて。……恥ずかしいんです」

「……それは、そうです。好きな人の服、脱がすんですから。
恋人になってから特に意識しちゃって」

「……顔、ニヤけてますよ？　姫様。
毎日ドキドキしてるシーナの身にもなってください」

「……次はブラウスですよ。
腕を伸ばしてください。右から通しますからね……」

「……ふふっ、ちょっと、姫様。いきなり笑わないでくださいっ。
……恥ずかしくなってきたのは、こっちですよ！
もう、笑わないで。ふふふっ、ははは。
……はー、もう、これじゃ、いつまでたっても終わらないですよー」

シーナ、姫様の後ろに回る。

「はいはい。いいから、着せちゃいますね！
右腕、通しますよ」

姫様、ブラウスの袖に右腕を通す。

「反対側、左も通しますよー」

姫様、ブラウスの袖に左腕を通す。

「前からボタン、閉めていきますね」

シーナ、後ろから姫様の前に回る。

シーナ、ブラウスのボタンを止めていく。

「……襟を整えて……よし。
次はスカートですね。広げるので、足通してくださいね」

シーナ、姫様にスカートを履かせる。

「……うんうん。スカートぴったりそうですね。よかった。
この流れでコルセットもつけていきますね」

「……そんな顔しないでください。
コルセットはたしかにキツいですけど、
つけたら腰回りのシルエットが綺麗に見えるんです。
それにほら、このコルセット、装飾も華やかだと思いませんか？」

「……シーナは、素敵でかっこいい姫様の姿がみたいなあ。
……みたいなあ。みたいなあ。
……ふふふっ、観念しました？
では、つけさせて頂きますね」

シーナ、姫様の腰にコルセットを巻いていく。

「姫様、前の辺りを手で抑えていてください。
後ろから紐で固定しますから」

シーナ、姫様の後ろに回る。

「紐を締めさせて頂きますね。
少し圧迫しますけど、我慢してくださいね」

コルセットに紐通しして縛っていく。

「……シーナは、この紐を通している時間、好きなんです。
穴に紐を通していくのは、地味な作業ですけど、
綺麗な編み上げを作れた時は、やっぱり嬉しいんです」

「……それに、姫様の後ろ姿を、こんなに長く眺めていられるのも、お手伝いをしているシーナの特権ですよね」

「紐を通し終えたら、最後に結び目をつくって……」

「はい。完成です。締まり具合、大丈夫そうですか……？……それはよかったです。編み上げも……ばっちり」

シーナ、後ろから姫様の前に回る。

「（眺めて）……うん……うんうん。とってもお似合いです」

「残るは、靴下とお靴ですね。靴下くらいは自分でお履きになられますか？」

「……ふう。シーナに履かせて貰いたいんですね？こんなに姫様のこと甘やかすメイドは、他にいないんですから。ちゃんと大切にしてくださいよ？」

「では、姫様。椅子に腰をかけてください」

「シーナもしゃがませていただきます……。ってもう、頭撫でないでください」

「……撫でやすい位置にあるのはわかりますけど……。……姫様に触れられるのは、嬉しいですよ。どんな時でも」

「さ、履かせますから、足を伸ばしてください」

「靴下を、こうして、広げて……。はい、足通してくださーい。それーっ、しゅるるーっ……」

シーナ、姫様に靴下を履かせていく。

「もう片方も。しゅるるるーっ……」

「最後は靴ですね。そのまま足を伸ばしていてください」

シーナ、姫様に靴下を履かせていく。

「靴下と同じようにまた片方ずつ履かせますね。

シーナ、姫様に靴を履かせていく。

「……右足さん」

「……そして、左足さん」

「はい。じゃあ立ってくださーい！
これで全身お着替えの完成です！
姫様、お疲れ様でした。とっても可愛くて最高です。ふふふっ」

【EP03：お散歩とお昼寝　隣で過ごす幸せ】

○庭

「ポカポカして気持ちの良い天気ですね、姫様。
風も優しくて……。久しぶりのお休みが雨じゃなくてよかった。
こんな日をお散歩日和っていうのでしょうね。
……姫様もそう思います？」

「（話を聞いて）……うん。うん。たしかに。
仕事が忙しいと、散歩の『さ』の字も浮かばないときありますよね。
今日は、気の向くままお散歩して、心の余裕を取り戻しましょう」

「ここは姫様のお庭ですから、気を遣う必要はありませんよ。
さあ、参りましょう」

「エルガー・愛のあいさつ（鼻歌で）」

「……姫様？　どうしました？　じっと見つめて。
シーナの顔に何かついてます？」

「……ああ、この歌ですか。
耳から離れなくて、つい口ずさんでしまうんです」

「……はい。朝も歌っていました。
……この前、姫様に連れて行って貰った演奏会で聞いた……。
……そうそう。エルガーの『愛の挨拶』という曲です」

「この曲は、エルガーが
婚約記念として奥さんに送ったものだそうです。
愛の証に曲をプレゼントするなんて、なんだかロマンチックですよね」

「……姫様もいつかご結婚されるのでしょうか？
姫様のウエディングドレス姿、絶対素敵でしょうね。
その時がきたら、選ぶの手伝わせてくださいね！」

「……え？　シーナの分も、ですか？
……ふふっ、たしかに。それも考えないといけませんね。
じゃあ……お互いに、
相手に着て欲しいウエディングドレスを選ぶのはどうでしょう？」

「女の子同士だから……。
いえ、姫様とシーナだからできるプレゼントですよね！　ふふふっ」

「あ、見てください！
ここの花壇、ずいぶん賑やかになったと思いませんか？」

「前に姫様が、『いろどりが少なくて寂しい』とおっしゃっていたので、
こっそりお花の種類を増やしてみたんです」

「……気に入って下さいましたか？　よかったぁ……。
姫様が褒めてくれるなら、頑張ったかいがあります」

「まだ咲いていないお花もあるので、
季節が変わったらまたこの花壇も表情を変えますよ。楽しみですね」

「……え？　ご褒美ですか？
花壇の手入れは、シーナもやりたかったことでありますし。
そんな、姫様が喜んでくれるならシーナは何もいらないです」

「本当ですって。主人（あるじ）の幸せはメイドの幸せなんです。
……。うーん、姫様がそこまでいうなら、ちょっと考えますね」

「んー……。どうしようかなあ。欲しいものですよねえ。
何にしようかなあ……」

「あ、そろそろ小麦粉がきれそうだったような……。
お紅茶も新しい品種が欲しいところではあります。
でもそれは、市場に行けば調達できますから……。
そういうのじゃないですよね」

「……姫様から貰って嬉しいもの、……姫様にして欲しいこと。
ん──……なんでも嬉しいですけど……」

「ん──…？　姫様？
　さっきからちょっと距離が近いような気がするんですが……。
　肩と肩がぶつかりそうで、危ないですよ？」

「もう少し離れて歩かないと……。
　ほら、手も何度も当たってますし。
　……あ、もしかして……」

「(何かに気づいて)姫様。ひめさまー？
　シーナ、わかっちゃいました。
　これは、シーナから言ったほうがいいですか？」

「ふふふっ。……はい、じゃあ、姫様。
ご褒美に、シーナと手を繋いでください」

「……姫様の手、柔らかくてあったかいですね。
ずっと握っていたくなる手……」

「……ふふふっ。それにしても姫様って、不器用の方ですねぇ。ほんと。
朝はあんなに大胆だったのに……」

「目が覚めて恥ずかしくなったんですか？
……耳まで真っ赤にして。そういうところ、可愛らしいですよね」

「……そういえば、最近、日記をつけ始めたんです。
と言っても、本格的なものではなくて、
その日にあったことや思ったことを
ただ箇条書きで綴るものなのですが……」

「ときどきページを捲って振り返ると、
思い出がすぐに取り出せる宝石箱みたいなんです。
……なにせ、日記のほとんどが姫様との思い出ですから」

「今日も書くことがいっぱいありそうで嬉しいです。
……姫様もはじめてみてはいかがですか？　日記。
……ふふふっ、考えておいてくださいね」

「こうして手を繋いで歩いてると、懐かしい気持ちになります。
小さい頃、まだシーナがメイドという仕事について間もない頃……。
右も左もわからなくて、失敗続きで、
お屋敷の隅で泣いていた時、よく慰めて下さいましたよね」

「あの頃暮らしていたお屋敷は、今よりずっと広くて、
シーナはいつも違うところで泣いていたのに、
どこにいても必ず姫様は、シーナを見つけ出してくれましたね」

「目を合わせて『大丈夫だよ』と、
声をかけてくれた姫様の優しい笑顔……。
とても安心したのを覚えています」

「シーナが泣き止んだ後は、
今みたいにこうして手を繋いで、
大人たちのところまで連れていってくれて、
一緒に謝ってくれましたよね」

「謝っている最中もシーナの手を離さずに、
ずっと握っていてくれた……。それが心強かった。
『この人の側にいたい。だから、そのために頑張ろう』
そう思えたから、今のシーナがあるんです」

「……姫様は、シーナの憧れです。
……そんな謙遜しないでください」

「シーナは、かっこよくて、可愛くて、頑張り屋さんで、
大きくなってからも、
シーナの手を握っていてくれる姫様が大好きです」

「……聞こえなかった？　絶対に嘘……」

シーナ、姫様に近づく。

「……姫様。好きです。……好き。大好き。ふふふっ」

「もうそろそろお庭を一周しそうですね。
……眠くなってきました？
そうですね。……シーナもすこし眠たいです。
中に戻ったらお昼寝でもしましょうか」

「……え？　このまま外でお昼寝、ですか？
たしかにこんな良い天気滅多にないですし、
いいかもしれませんね、日向ぼっこ。
外で寝るのも気持ちよさそうです」

「場所は……。あ、姫様。この辺りの芝生いかがでしょうか？」

「……そのまま横になったら、頭、痛いですよね。
ならここは一つ、シーナの膝枕をお使いください。
シーナのお膝は、ちょっと小さいかもしれませんけど、
寝心地には自信はあるんです」

「……では、失礼して……」

シーナ、膝へ姫様を招く。

「さあ、姫様。お膝へどーぞ。
……そうそう。頭をシーナの方に向けて。
お腹の方をみて……。力を抜いて、着地」

「……ふふっ、どうですか？　シーナの膝枕は。
……柔らかいですか？
だから言ったでしょう？　寝心地には自信あるって」

「姫様の顔が、こんなに近くに……シーナの膝の上にあるなんて……。
独り占めしてるみたいで贅沢です」

「……（小さな声で）姫様。ひーめさま。
……ん？　なんでもないです。
ただ、名前を呼びたくなって。……だめでしたか？」

「……シーナの名前もいっぱい呼んでください。
いっぱい聞きたいです。姫様の声」

「……ふふふっ、なにその呼び方、おかしい……ふふふっ」

「……まだ眠れませんか？
なら、シーナが子守唄でも歌いましょうか？
……優しい歌、ですか。ならこんな曲はどうでしょう？」

シーナ、マザーグースの子守唄『Hush little baby』を
ゆっくり囁くように歌う。

【EP04：入浴　洗って流して 心を開いて】

○風呂場

「お待たせしました。姫様。
思ったよりお昼寝してしまったので、
夕食の準備に時間がかかって……」

「でも、姫様と一緒にお風呂入るために、
ちゃんと済ませてきましたよ？
メイドの本分は忘れてませんから」

「……もう、姫様。
そんなジロジロみられると、恥ずかしいです」

「だってシーナ、姫様に比べて、胸小さいし、子供みたいな体型で……。
……姫様が気に入ってくださっているなら、良いですけど」

「さあて、お背中流させて頂きますね。
お散歩で汗もかいたでしょうから、さっぱりしちゃいましょう。
姫様はリラックスして、シーナに身体を預けてください」

「まずは軽く流していきますね。……桶にお湯を汲んで……」

シーナ、姫様にお湯をかけ流す。

「どうですか？　熱くないですか？
……では、このまま続けますね」

「そうしましたら、上から順番に洗っていきます。
まずは髪の毛からですね」

「手のひらに、シャンプーをのせて、伸ばしながら軽ーく泡立てて……。
では、頭、失礼しますね」

「マッサージをするように、シャンプーを頭皮全体に馴染ませて……。
指で弧を描くように……」

「……きもちいいですか？　痒いところないですかー？」

「……姫様、頭皮だいぶ硬くなっていますね。
疲労が溜まっている証拠です。
この頭が、いっぱい考え事をして、姫様を支えてくれたんですね。
いっぱい褒めてあげないといけないですね」

「……いいこ、いいこ。……いいこ、いいこ。
姫様の疲れ、とんでいけー。
……あ、ちょっと解れて柔らかくなってきましたね」

「もう少し続けますね。
……いいこ、いいこ。……いいこ、いいこ。
……疲れよ、飛んでけー。……どうです？　少し楽になりました？」

「じゃあ、お流ししますね。目を瞑って、軽く下を向いてください」

「……はい。綺麗に洗い流せましたよー。
次は、首から下、背中を洗っていきますね」

「今日の石鹸は、ちょっと特別なんですよ？
前に使っていたものが小さくなってしまったので、
新しいものを買ってきたんです」

「見てて下さいね。……こうやって、手で泡立てていくと……。
ほら、いい香りがするんです」

「……気づきました？　ラベンダーの香りです。
気分も落ち着くし、素敵だと思いませんか？」

「……よかった。気に入って頂けて。
じゃあこの石鹸で、洗っていきますね」

「……うなじから、首回りを優しく……優しく」

「そのまま、流れで、背中いっちゃいますね。
姫様の柔肌を傷つけないように、優しく……優しく」

「コルセットをつけていた部分は、労うように入念に。
よく頑張りましたねー。よしよーし……よしよーし……」

「姫様のドレス姿、とても素敵だったなあ。
……シーナの選ぶセンスが良いのではなくて、
姫様がお綺麗だから似合ってたんですよ。
また良いドレス見つけたら、
こっそり買っちゃおうかな……なんて。ふふふっ」

「泡が足りなくなってきたので、
もう一度石鹸を泡だてて……ふわふわにして。
次は、腕を洗わせて頂きますね」

「じゃあ、右腕からいきますよ。
腕を洗うとき、さっきより近づいて、くっつくので、
洗ってる最中、肌と肌が触れてしまうかもしれませんが…」

「……これは、洗うだけですから。
ヘンな気持ちにならないでくださいね？」

「肩から二の腕、満遍なく泡で包み込んで……。
肘……手首……手のひら……。
指も一本ずつ大事に……」

「小指さん、薬指さん、中指さん、人差し指さん、親指さん。
指と指の間も忘れずに綺麗にして……。よし」

「では、左もおんなじように……。
肩から二の腕に、手を滑らせて……。
肘……手首……手のひら……。
右腕と同じように、指も一本ずつ……」

「小指さん、薬指さん、中指さん、人差し指さん、親指さん。
指と指の間も、同じように……」

「……姫様、さっきから呼吸がすこし荒い気がするんですが……。
ヘンな気持ちにならないって約束しましたよね……？」

「……そんなこと聞かないでください。
シーナだって、その……。うう……。
こんなに好きな人と裸でくっついていたら、それは……。
あーもう、顔、熱くなって来ちゃいましたよ」

「……すみません。これ以上触ると
シーナも、ヘンになってしまいそうなので、
前は、ご自分で洗って下さい」

「……ダメです。ここはお風呂場なんですから。
……もう、姫様のえっち」

「……。どうですか？　洗い終わりましたか？
では、流していきますね」

「洗い流し終わりました。これで綺麗になりましたね。
それでは、湯船に参りましょうか」

○湯船

「ふわああ……。気持ちいいですねえ。
……姫様は湯加減、大丈夫そうですか？
……丁度良いですか。それはなによりです。
肩まで浸かって下さいね。身体の芯まであったまりますから」

「なんだかんだのんびりしているうちに、
時間は過ぎてしまうものですね」

「……何もしてなくて不安、ですか？
姫様は、ほんと働き者ですね」

「でも今日はお休みなんですから、しっかり休んでください」
お花に水を上げないと枯れてしまうように、
適度なおやすみをとらないと身体を壊してしまいますから」

「……それに、せっかくシーナと二人きりなんですから、
他のことは考えないでください。……ね？　ふふっ」

「……裸の付き合い、なんて言葉がありますが、
誰かと一緒に入るお風呂って良いものですね。
不思議と心を開いて話せるような気がして」

「姫様とシーナが喧嘩したとき仲直りするのは、
いつもお風呂場でしたよね。
……はい。気持ちが落ち着いて、素直になれるんです」

「大きくなって、最近は喧嘩しなくなりましたけど、
これから先、もしぶつかることがあっても、
きっと姫様とシーナはここで仲直りするんでしょうね」

「……姫様もそう思います？
……気持ちが通じ合ってますね、私たち」

「……姫様？　顔が近いですけど……。どうされました？」

「……ん。……キス。こんなところで。
……素直になっちゃったじゃないですよ、もう……」

「あまり長風呂してしまうと、のぼせてしまいますね。
そろそろ上がりましょうか」

シーナと姫様、湯船から上がる。

「足元、滑らないように気をつけてくださいね」

【EP05：眠りにつく前　囁きのワルツ】

○ドア前

シーナ、ドアをノックする。

「……姫様。シーナです。入ってもよろしいですか？」

○姫様の部屋

シーナ、部屋に入りベッドへ近づいていく。

「……ベッドの中、お邪魔しますね」

シーナ、姫様のベッドに入っていく。

「……んしょ、んしょ……。お隣、失礼します。
……ふふふっ、姫様のベッドに入るのは本日二度目です。
もう、おやすみの時間がきてしまったんですね」

「……急にどうしたんですか？　一緒に寝て欲しいなんて。
……あー、散歩の後にお昼寝しましたもんね」

「……ふんふん。なるほど。
寝付くまでの、お話相手が欲しかったんですね」

「……ええ、もちろんです。
姫様が寝るまで、いくらでもお付き合いしますよ。
シーナも、もっと姫様と一緒にいたいなーって思っていましたから」

「……もし姫様からお誘いがなかったら、
勝手に潜り込んじゃっていたかも」

「……今日のおやすみ、楽しかったですね。
姫様とゆっくりできて、シーナは満足してます。
こんな日がずっと続けばいいのに、って」

「……そうですね。またおやすみを作って、二人で過ごしましょう。
まだまだ時間はたくさんありますから」

「……姫様に聞きたいことがあるんですけど……。いいですか？」

「……どうですか？　シーナ、甘えるの、少し上手になってきました？
……恋人になりたての時よりは、ですか。
でも少し進めたみたいで、よかった……」

「……気持ちを確認し合った直後は、どうしたらいいかわからなくて。
……主人とメイドの関係が長かったのもありますが、
そもそも、シーナは姫様と一緒に居させて貰えるだけで、
十分幸せでしたから……」

「姫様は、
シーナが絶対叶わないと思っていた『恋人になるという夢』まで、
叶えて下さった……。
……時々考えるんです。
これ以上、幸せになったら、神様に怒られるんじゃないかって」

「……いいんですか？　もっと幸せになっても。もっと甘えても」

「……そうですね。姫様の言う通り、
今日は二人きりで過ごす休日でした。
……今日ぐらいは、きっと、神様も見逃してくれますよね……？」

「……ねえ、姫様。こっちむいて……」

「……ふふっ。目、合いましたね。
……こんなに顔が近いと、息遣いまで聞こえちゃいそう……。
…………姫様」

シーナ、姫様にキスをする。

「……んっ。……すみません。姫様のこと見つめていたら、
キス、したくなっちゃって……。
今日たくさんしてるはずなのに……」

「……えっちじゃありません。
姫様が好きだから……したくなるんです。
それに、もっと甘えていいって姫様が言うから。
……もうちょっとだけ、してもいいですか？」

「……ん。……ん。……ん。ふう……。あと少しだけ……。
……ん。……ん。……ん。ふう……。
さいご……。……ん。……ん。……ん」

「……ふう……。姫様の唇、熱くて、柔らかくて……。
……キスしてる時、夢の中にいるみたいで、ふわふわします」

「……姫様、もっと近くにきて。ぎゅー、させてください」

「……ぎゅー……」

「……どうしましょう。姫様。
姫様のことを想うと、姫様の側にいると、
好きって気持ちが溢れて、止まらないんです。
何回触れても、何回言葉にしても、全然足りないんです」

「……姫様のことが好き。世界で一番、好き。大好き」

「……目を閉じたら、今日が終わってしまうと思うと寂しいです。
……そうですね。目を開けたら、会えますもんね。
明日もあさっても……。
……はい。また夢をみるかもしれませんし」

「……大丈夫。姫様とシーナは、何があっても一緒ですから」

「……今日はこのままくっついて眠りましょう。……姫様、おやすみなさい」

【BONUS：姫様の夢　猫シーナがひたすら好きと言ってくる件】

○姫様の夢の中

猫になったシーナがベッドの上で甘えてくる。

「……にゃあ。……にゃあ。
ひめさまあー……。ひめさまあ……。
かまってほしいにゃあ……。遊んでほしいにゃあ……」

「……どうしましたにゃ？　不思議そうな顔をして」

「……何を言ってるんですかにゃ？　シーナは猫ですにゃ」

「ほら、みてみて？　みみも、しっぽもあるでしょう？」

「……夢見たいな光景にゃ？
きゅんきゅんしているにゃ？
それはよかったにゃあ」

「……夢かどうかなんて、この際どうでもいいのにゃ。
それよりー、かまってほしいのにゃあ」

「……にゃにゃにゃ。近づいちゃったにゃ。
ひめさまは、シーナのこと好きにゃ？」

「きこえないにゃー？
……好きにゃ？
……えへへ、シーナもー。ひめさまのこと、すき……」

「くっつき攻撃にゃー。ぎゅー……」

「……ひめさまは、シーナがひめさまのこと、
どれぐらい好きか知ってるにゃ？」

「ずっと、ずっーっと、　ひめさまのこと考えてるのにゃ。
お掃除してる時も、買い物してる時も。
ひめさまがよろこぶことは、にゃんでもしてあげたいって」

「……たまに恥ずかしくにゃっちゃいますけど、
ほんとは、もっと色々……先のこともしたいって、
シーナは思ってますにゃ」

「……あ〜〜〜恥ずかしがってるひめさま最高にゃあ〜〜。
ひめさまは、どうしてそんなに可愛いのにゃ？」

「……もう我慢できにゃい。
シーナの気持ち、いっぱい伝えさせてくださいにゃ」

「……ひめさま。……すき。すき。好きです。大好き。大好きにゃ」

「好き……好き、好き、好き、好きいー。……好き。大好きだにゃー。
……すーき、すき、すき、すき。にゃーん」

「にゃん、にゃん、にゃん、にゃん。にゃあー。
にゃん、にゃん、にゃん、にゃん。にゃあー」

「……え？　なんて言ってるかわからないですにゃ？
好きって気持ちを、猫語で表現してるんですにゃ」

「にゃあ、にゃあー……。好きだにゃあ……。
にゃあ、にゃあー……。好きだにゃあ……」

「……だーめ。まだ伝わってないのにゃ。
……もっと言わせて？」

「すき…すき…すき…すき…。
すき…すき…すき…すき…。
…大好き。…大好き。…ダイスキ」

「ふふふっ。どうですかにゃ？
ひめさまの右耳、シーナの気持ちでいっぱいににゃりました？
「……にゃあー！　耳が真っ赤ですにゃ。
……喜んで貰えて嬉しいにゃー」
「……じゃあ反対側も平等にしてあげるにゃ。
……よいしょっ、よいしょっ」
「左側とうちゃーく……ですにゃ。
ほら、こっちきて？
　左耳も、好きでいっぱいにしちゃいますにゃ？」
「……ひめさま。……すき。すき。好きです。大好き。大好きにゃ」
「好き……好き、好き、好き、好きいー。……好き。大好きだにゃー。
……すーき、すき、すき、すき。にゃーん」
「にゃん、にゃん、にゃん、にゃん、にゃん。にゃあー。
にゃん、にゃん、にゃん、にゃん、にゃん。にゃあー」
「ふふふっ。もう、シーナが何言ってるか、わかりますにゃ？
……好きってことですにゃ」
「にゃあ、にゃあー……。好きだにゃあ……。
にゃあ、にゃあー……。好きだにゃあ……」
「すき…すき…すき…すき…すき…。
すき…すき…すき…すき…すき…」
「…大好き。…大好き。…ダイスキ。……大好き」
「はあー、ひめさまにはいくらでも、好きって言えちゃうにゃ」

「……言い過ぎってことはないですにゃ。
何回だっていいますにゃ」

「ひめさまの耳に残るくらい、
いつでもシーナの声を思い出せるくらい、
ずっと、ずっと、言い続けるのにゃ」

「……好き。……好き。……大好き」